アリア
～囚われの花～
早瀬 響子
illustration
佐崎 なおみ

アリア～囚われの花～

《立読み版》

早瀬　響子

イラスト　左崎　なおみ

1

「なにぐずぐずしてやがるんだ、このガキ！」

「あっ……！」

冷たいみぞれが雪に変わる中、罵声とともにいきなり足をすくわれ、純也（じゅんや）は水たまりの中に倒れ込んでしまった。必死に運んでいた、足場を組むための重い鉄棒の束（たば）が音を立てて崩れ、十七歳にしては痩（や）せて小柄な純也の背や足を容赦なく打つ。

純也は痛みにうめき、思わず泥に汚れた顔を上げた。

数ヶ月前から純也が働かされているこの建設現場の監督が、赤ら顔に灰色の目をぎらつかせ、薄ら笑いを浮かべて見下ろしている。その後ろでは金髪の、ハンサムな若い男がやはりニヤニヤしながらこちらを見ていた。夜間作業用の強烈なライトに照らされた二人の顔は、純也には悪鬼のように見える。

どうして彼らがここにいるのだろう。泥水を滴（したた）らせ、震えながら純也は思った。今日は確か二人とも、誰か偉い人の視察があるから現場には顔を出さない筈だと作業班の皆が教えてくれて、少しほっとしていたのに。

「す、すみません。ディドロさん……」

だが、そんなことを考えている場合ではなかった。おどおどと謝ると、ぬかるんだ地面に四つん這い(ば)になり、かじかんだ手で出来るだけ急いで棒を拾い集める。自分が今日中にこれを全て片づけられなければ、一緒に作業をしている皆にまで迷惑がかかってしまうのだ。

けれど、昨夜から食事も与えられずに休みなしで作業させられていたので、頭がふらふらした。そうでなくてもこの数日間は、遅れ気味のスケジュールのつじつまを合わせるためか、ただでさえきつい仕事が夜遅くまで続いているのである。

唇から、真っ白な息が漏(も)れる。南国イタリアの首都、ローマでも二月末はかなり冷え込む。今日はずっと冷たい雨が降り続き、それが今、夕暮れ時になってみぞれからさらに雪へと変わっていた。

そんな日に屋外で一日中、たった一人でこの作業をさせられていた純也の身体はすでに芯まで凍えきっていた。身につけている汚れたシャツとぼろぼろのジーンズ、そして穴の空いたスニーカーは今のディドロの行為のせいで、さらにずぶ濡れになってしまっている。

「なんだディドロ、こいつだったのか。昨夜おれの劇場の、舞台に勝手に上がり込んでた馬鹿は」

「そうなんですよ、フランチェスコ様。身の程知らずもいいところです。だから罰を与えてたんですがね」

ディドロがおもねるようにうなずくと、若い男――フランチェスコ・ペザーロは薄ら笑いを浮かべて進み出、革靴のつま先で、地面に這っている純也の顔を上げさせた。彼はオーダーメイドのスーツとコートに、暖かそうなマフラーと革手袋までつけている。ディドロも作業服の上に防寒着をしっかり着込んでいた。

彼らの背後には、だんだん強くなる雪よりももっと白く、建設途中の歌劇場がそびえ立っている。正面に大きなアーチ型の窓を並べたこの近代的な建物は、古くからあるローマ歌劇場に対して、新歌劇場、あるいはペザーロ歌劇場などと呼ばれている。最近ローマを中心に急速に勢力を拡大してきているペザーロ財閥により、九月半ばの完成を目指し、急ピッチで工事が進められているからだ。

「……」

純也は震えながら二人を見上げた。『財閥なんて表向きさ。ペザーロの実体はマフィアなんだ』と父が憎々しげに話していたことを思い出す。

ペザーロ家は、もともとイタリアの南部、シチリア島出身で、裏社会ではそこそこ名の知れた一族だったが、十年ほど前から、建設業や流通、観光など様々なビジネスに参入して成功を収め、大きな財を成すとともに、政治・経済の根幹にまで影響を及ぼすほどになったのだ。現在でも、一族の人間たちが全ての系列会社を支配、経営していて、それぞれがお互いに固く結束している。そして今、一族の名誉と威信をかけて、この歌劇場の建設に取り組んでいるのである。

イタリアでは、オペラは国を代表する文化であり、それを主宰することは財界でも一般社会においても大変なステータスなのだ。しかも自分たちが建設した新しい歌劇場でそれを行うとなれば、ペザーロ財閥は一気にイタリアを代表する企業グループにまでのし上がることが出来る。それは一族に計り知れない利益をもたらすことになるだろう。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

アリア～囚われの花～

《立読み版》

発行日　２０１１年７月２８日
著者名　早瀬　響子
イラスト　左崎　なおみ
発行所　【ＭＩＬＫ（ミルク）－ＣＲＯＷＮ（クラウン）】
株式会社水晶院
http://www.milk-crown.net/

(C) Kyoko Hayase 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。